

2013年 3月

中国四国農政局
高知地域センター

News Letter

“柚子”の香りがする養殖魚『ユズブリ』の研究・開発/高知大学

3月号のテーマは魚の養殖です。冬の時期に、美味しい魚として喜ばれるブリ。成長するにつれて名前が変わる出世魚と知られ、西日本の太平洋側を中心に養殖での生産が盛んに行われています。ブリは寒ブリに代表されるように寒い季節の魚としてイメージが強いですが、実は適正水温は13～30℃と高く、暖かい地域に生息していることから、全国でも限られた所でしか研究されていません。

高知大学農学部の水産研究グループは、「高知らしい魚を作ろう！」と高知県が日本一の生産高を誇る“柚子”を使って『柚子の香りがする養殖ブリ』の研究・開発に取り組みました。

＝高知らしい養殖ブリを目指した研究！＝

高知大学が手掛けてきた柚子を利用した養殖ブリは、果汁を主に利用した“柚子鱒王”と果皮を利用した“高知モデル”との2種類があります。

当初、柚子は魚に対し抗酸化作用があるのか、成長に悪い影響を与えないのか等が研究テーマでしたが、或る日、ブリの身を捌くとほんのりと柑橘系の香りがすることに気がつきました。試食してみると、やはり柚子の香りが漂い、そこから『どうやったらブリの身に柚子の香りをつけることができるか！』へとテーマが変わり、平成17年に水槽で基礎データを採取した後、水産業者の協力の下、海面生け簀での本格的な実証試験を開始しました。養殖はまずブリの稚魚であるモジャコの捕獲から始まり、高知県では5月に土佐湾沖で捕獲します。それから約一年間かけて成魚となり、その年の秋の出荷に向けて給餌日を決めながら4



高知大学水産研究グループの学生さんと“ユズブリ”

～6kgの大きさに育てていきます。高知モデルのブリの餌には、大豊町にあるJA土佐れいほく柚子加工場から出た無農薬栽培の柚子果皮を使い、ペースト状にし混合させます。魚には植物性のものを多く食べると体内で消化できない特性があるため、どの程度で香りがつくのか、肉質はどのようになるのか等の研究を積み重ねました。

その結果、柚子入りの餌を与えたブリは、通常のブリに比べ、酸化によって褐色になる赤身の鮮やかさが長持ちして鮮度保持に繋がりました。併せて、柚子の香り成分であるリモネンやミルセンにより、脂分はそのままであるがさっぱり感が増し魚の生臭さを抑えることができました。

＝日々の弛まない養殖研究から生まれた魚達＝

近年、人の手で育てる養殖だからこそできる魚の味作りが全国各地に広がり、梅酢鮎・お茶鯛など農作物を使ったブランド魚や、柚子ブリから始まった様々な柑橘魚が生まれています。

高知大学の深田准教授は、「養殖研究には毎日の魚の世話は欠かせず、学生同士が土・日曜日でも交代制で取り組んでいます。魚は水温等の環境により動きが大きく変わって思い通りにいかない所もあるけれど、そこが面白い。そして、餌の研究成果は直ぐに商品化に繋がるので、魚の体の仕組みや栄養特性を追求しながら、柚子ブリに続く新たな高付加価値のある養殖魚を目指して、餌(飼料)の開発に取り組んでいきたい」としています。

※現在、柚子鱒王は鹿児島県内の漁協で販売されています。



【ブリの養殖研究】

ペースト状のユズ果皮
を餌に混合水槽での
実証試験

『食品の表示を考える意見交換会』の開催について



(パネルディスカッション)

食品や食品の表示に対する信頼性を高めるために、高知地域センターは平成25年2月20日、高知市中央卸売市場会議室において「食品の表示を考える意見交換会」を開催し、消費者や食品事業者等約80名が参加しました。

はじめに、「食品表示の現状と新食品表示制度」と題して消費者庁食品表示課担当者の基調講演を行い、その後、『わかりやすい食品表示と食品表示の信頼性向上のための取組』をテーマに、高知大学国際・地域連携センター副センター長がコーディネータとなり、生産者団体や食品製造業者、消費者団体等6名のパネリストがパネルディスカッションと会場との意見交換を行いました。

参加した食品製造業者からは「商品作りに消費者の声を頂いて、それを反映させている」。また、消費者からは「命に直結した食の安全について関心が非常に高い」「食品表示に対して、意識を高く持つことに心掛けているが分かっていないことも多い。もっと、様々な情報を知りたい」。そして、「今回の食品表示の一元化について、消費者の要望に添った形にしてほしい」等活発な意見や質問が出されました。

JA高知春野(高知市)で、25年産水稻作の種蒔きがスタート

桜の便りとともに、いよいよ平成25年産の水稻作が始まりました。高知市春野町森山地区にある高知春野農協の育苗センターでは、春の訪れに合わせて、3月3日から種蒔き作業に追われています。同農協は、春野町内と隣町の一部の生産者約500人に向けて水稻苗を生産しています。取り扱う品種はうるち米の早生米「コシヒカリ」ともち米「ヒデコモチ」で、1日に2,400枚、約250haにあたる約5万枚の水稻苗を3月末までに生産者へ手渡します。

種蒔き作業は、①種籾を芽がでやすいように水に1週間程浸し、②室温30℃の出芽室へ24時間保管しながら小さな芽を発芽させます。③その後、全自動の播種プラントで種籾を蒔き、薄く土を被せて、④再度、出芽室に入れます。⑤その後、緑化室で22～23℃の温度管理を行い、10cm程度の苗に生長させていきます。

同農協営農渉外課担当者によりますと「同地区の早い生産者には今月の第2週目から配布し、田植え作業は4月上旬から始まって4月10日前後が最盛期になりそうだ」ということです。あと1カ月もすれば、県内各地の新緑鮮やかな田園地帯は、全国に先駆けて一番忙しい田植えの時期を迎えます。



(ガラス温室の緑化室)

(播種プラントで流れ作業)



(水稻の苗)



インフォメーション/2013年春の農作業安全確認運動！



毎年約400件発生している農作業死亡事故を減少させるため、本年も、事故が多発する春作業の3～5月を農作業安全対策の重点期間として「春の農作業安全確認運動」を実施しています。

『一人ひとりが主役 広げよう！安全確認』をテーマにした農作業事故を減少させる“2013年春の運動”にご協力ください。

編集：中国四国農政局 高知地域センター

〒780-0870 高知市本町4丁目3-41 高知地方合同庁舎

TEL (088)875-2151 FAX(088)820-0202 <農政局HP><http://www.maff.go.jp/chushi/>

◆各種メールマガジンを配信中(登録はこちらから) <http://www.maff.go.jp/chushi/mailm/index.html>